
軍隊主義な帰宅部

猫小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軍隊主義な帰宅部

【Nコード】

N3607B

【作者名】

猫小判

【あらすじ】

度々起こる有志による放送室ジャック。その大半は帰宅部の集合を呼び掛ける放送だった。そして、今日も帰宅部に集合がかかる…。…。

『帰宅部所属の諸君に告ぐ。 16:00（ヒトロクマルマル） 16:00に高等部3年2組教室に集合せよ。 繰り返すー』

校内の全てのスピーカーが、まるでどこかの軍隊の放送のような内容を叫んだ。

現在時刻は14:30（ヒトヨンサンマル）。完全に授業中だ。壇上で授業とは関係のない熱弁を奮っていた教師は、

「君達、僕は放送室に行ってくるから。大人しく自習していなさい」そう告げて、教室から飛び出して行った。

にわかに騒がしくなる教室。この教室の五割（掛け持ち有）は、俺を含めて帰宅部に所属している。

教室を騒がす話題は当然、有志による放送室ジャックによってもたらされた、帰宅部の集会についてだ。

俺は前の席に座っている同じ帰宅部所属の、コードネーム『J』に声をかけた。

「おい、鈴木。今回の集会、どう思う？」

「おう、そうだな……………ってお前俺のことコードネームで呼べって言っただよな!？」

J、もとい鈴木は稲妻のような裏拳と共にノリツツコミを繰り返した。……甘え、言わば激辛カレーを喰った後の水ぐらい甘え。

俺は見事に鳩尾に裏拳を受けて体をくの字に折り曲げた。

「くそう、ノリツツコミは素直すぎて下の下だが……………拳は素晴らしいぜ……………ぐふっ」

俺は力無く机に伏せた。

「死ぬな！ 生きるんだ後藤ーッ!!」

涙を流して叫ぶ鈴木こと通称ザコ生徒。

あ、ちなみに後藤ってのは俺のことね。

俺はぶつちやけアホらしくなってきた、むくりと起き上がった。

「やっぱ鈴木のお笑いセンスは下の下だね。それよりも今回の集会だが……」

「さりげに酷くねえか？ 何？ 俺のお笑い全否定ですか？」

鈴木はセリフとは裏腹に非常にショックだったらしい。しかし、真実なんだからしょうがないじゃないか。

俺は悲しむ鈴木は無視して、話を続けることにした。

「まあ多分、今回の集会はいつものように規則の再確認だろ」

「なんだよお。悲しんでる俺は無視か？ お？」

悲しみのポーズをスルーされた鈴木は逆ギレして、あるうことが俺にガン飛ばしてきやがった。

俺はぐつ、と拳を固く握り、

「うぜえ」

渾身の右を鈴木の高尾に打ち込んだ。

「げふつ……！」

渾身のパンチをほぼ完璧にもらった鈴木はそのまま机に突っ伏し、一時的に帰らぬ人となってしまうた。

「あつ、いけね。またやつちまったよ」

こうなってしまうば、鈴木は放課後まで目を覚ますことはないだろう。

……仕方ない。俺も放課後まで夢の世界で隙を潰すか……。

俺はまた机に伏せ、襲い来る睡魔に意識を委ねた……。

現在時刻 15:59。

未だに帰宅部の今日の集会場に至っていない俺と鈴木は、疾風の如く廊下を駆けていた。

目指すは音楽室。高等部3年2組教室というのは権力に対するフイクで、16:00の時は音楽室に集合する決まりになっている。

道行く一般生徒をすり抜け突き飛ばし踏み倒し、スピードを落とさず一心に駆け、ようやく音楽室へと辿り着いた。

音楽室の引き戸を勢いよく開き、俺と鈴木は同時に頭を下げた。

「2年後藤、遅れました！」

「2年鈴木、遅れました！」

壇上に立つ帰宅部の部長は怒り心頭に、遅刻した俺たちへの罰を言い渡した。

「今日は時間もない。腕立て十回で勘弁してやろう」

「はいッ！」

俺と鈴木はすぐさま地に伏せ、腕立てを始めた。

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十！」

「よし！ 貴様等も整列しろ！」

「はいッ！」

俺と鈴木は切れる息はそのままに、気持ち悪いくらいに等間隔に並ぶ帰宅部員達の列の最後尾についた。

部長はゆったりと壇上を左右に歩き出した。

「今日諸君に集まってもらったのは他でもない。最近、我々帰宅部員の風紀が乱れているらしい。つまりは規律の再確認のためだ」

部長は立ち止まり、こちらに目を向けた。

「帰宅部の活動内容とはなんだッ！」

『速やかに家に帰宅すること、行きがかりに目に入ったカップルを爆砕することですッ！！』

「よろしい」

部長は満足そうに笑みを深めた。

「さて、帰宅部の三大原則を……遠藤、言ってみろ」

「ハッ！」

遠藤こと最前列、部長の前に立つザコ生徒は、日帝軍でさえ惚れ込むような素晴らしい敬礼をして一步前へ。

「一つ！ 寄り道しないことッ！！一つ！ 買い食いないこと

ッ！！一つ！ カップルは爆砕することッ！！」

そう叫ぶように述べて、す、と下がった。

部長は満足げに頷く。

「素晴らしい。諸君も遠藤のような立派な帰宅部員を目指せ！」

『はいッ！！』

その様はさながら軍隊。これだけ統制の取れたこの軍であれば、簡単にこの学校の実権を握ることが出来ると感じるのは気のせいだろうか？

壇上の部長は、ビシッと音がするくらいに右手を天高く掲げる。

某ちよび髭の伍長殿でお馴染みのあのポーズだ。

部員達もみんな同じように右手を掲げた。

「貴様等は何だ？」

『帰宅部です！』

「貴様等は何だ！？」

『帰宅部です！！』

「貴様等は、何だッ！？」

『帰宅部ですッ！！』

部長はさつと右手を下ろし、高らかに告げた。

「諸君らの健闘を期待する！ 以上、解散！！」

『ハッ！』

部員達は蜂の子を散らすかのように素早く音楽室を退去した。当然、俺と鈴木もその波に乗って帰路へとついた。

せかせかと不自然にならない程度に帰路を猛進していると、不意に鈴木が口を開いた。

「あのさ、後藤」

「どうした？」

「これって、ひがみ……」

「言つな鈴木。それ以上言ったら……」

俺と鈴木は互いに涙を流した、自分の隣を歩くのが男だということ

に。俺と鈴木は涙を流し続けた、生まれもつての不公平に……。

（後書き）

はい、若気の至りとしか思えない拙作でした。あまりに適当だなあ、と自己嫌悪中。でも笑って頂けたら幸いです。ちなみに、ちよび髭の伍長殿が分からないという方にヒント。『我が闘争』の著者である20世紀最強（猫小判の偏見？）の独裁者です。これでも分からない方は感想とか、メールフォームに質問を入れてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3607b/>

軍隊主義な帰宅部

2010年10月28日04時52分発行